発表要旨

ローマの水道橋

―ガールの水道橋を中心に―

山本晴樹

大分県における「石の文化」を象徴するものの一つとして近年注目されるようになったのがアーチ型の石橋である。本報告では西洋古代史の視点からその源流と思われるローマの水道橋、とりわけ筆者にとって関心のあるローマ属州ナルボネンシス（現南フランス）のガールの水道橋（Pont du Gard）をとりあげた。

というのも、この水道橋は現在南フランスのガール県を流れるガール（ガルドン）川に架かる水道橋であるが、ローマ時代の水道橋遺跡としてはきわめて保存状態の良いものであり、この水道橋をみていくことによって、石の文化の一つの原型が探れると思うからである。

ガールの水道橋は、本来水源のあるウケティア（現ユゼス）からネマウスス（現ニーム）の分水塔（castellum divisorium）に至る約五〇キロメートルの水路のほぼ中間に位置している。長さ二七五メートル、高さ四八・七七メートル、最上段の水路は高さ一・八五メートル、横一・二メートルという巨大な建造物である。建設時期は当初アウグストゥス期とされていたが、最近その土木技術の高さを考慮して、一世紀後半とされるようになった。その土木技術で驚かされるのは最上段の水路を支える三層の大アーチであり、また四三センチメートル／キロメートルという微妙な傾斜である。

報告ではガールの水道橋のこのような建築史的意義とともに、水道橋によって支えられている水路が都市領域にとってもつ意味についての言及した。即ち、歴史学的にその確定が困難な都市領域の姿を水路の遺跡はその一部ではあるが、目に見える形で提示するという点である。この点については今後他都市とその水路の遺跡を比較研究をすることによって議論を深めていく必要があると思われる。

《参考文献》

A.L.F.Rivet, *Gallia Narbonensis*, London, 1988.

R.Chevalier, Gallia Narbonensis, *ANRW* II 3(1975), pp. 686–828.

L'aqueduc antique de Nimes, *Bulletin de l'Ecole Antique de Nimes*, no. 21(1990).